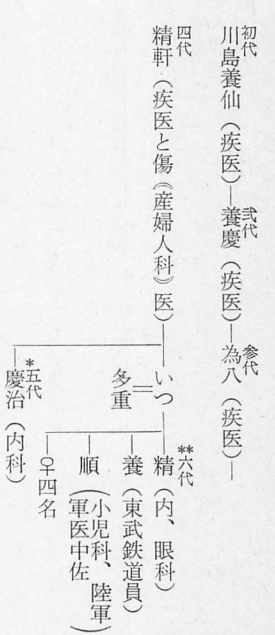
我が川島家の医史

川島恂二

我が川島家は常盤屋の号の家で日光礼幣使街道、壬生藩金崎の宿の街道筋で、本陣になった事もある。本家から三番目に一七七〇年頃に一番新しく分家した。

大本家の川島は吉村屋と号し南朝方で、後醍醐天皇の皇子恒良親王の重臣であったが、建武中興後、新田義貞に奉ぜられて越前金ケ崎域に拠った親王は再び足利尊氏と戦うこととなり落城した。それで親王は京に送られて殺されたが、その重臣等は南北朝軍勢入乱れる関東に落ちて、北畠親房等と通じた宇都宮氏を頼ったものか？　又は旗色鮮明でなかった皆川氏を頼ったものか？　それぞれに好意を寄せたらしい伝えもあるが不明である。要するに反足利方で好機到来を待って、皆川、宇都宮対陣の中間の小倉川の現在地に留まって金ケ崎城の再起を念じて金崎（かなさき）の地名を名付けて宿（しゃく）を経営創設した。



大本家吉村屋（栃木県上都賀郡西方村金崎）には天皇桜（吉野山を忘れぬ様に、吉野由来の桜の木）の樹令七―八百年の巨木があったが明治四三年の台風で倒れた。そんな訳で大本家は古い。

我が三番目の分家常盤屋は初代から儒医であった。

川島家（常盤屋）系譜を示すと、

初代儒医養仙（宝歴四、一七四五年生、寛政元一七八九年歿三六歳）は本家の二男として生まれ、両親に非常に可愛がられたので本家の向い側に道路を東に隔てて分家に出して貰ったが、小倉川の大増水で流され、現在の本家より南の下流の地にまた土地を貰って分家となった。

江戸に学び所蔵本の書庫の蓋の裏書を読むと本郷金助町辺の購入が多く、四書五経の儒学が多い。神農氏木像（天明八年東都神田住後藤秀融作、平出玄通より養仙に之を譲る、と底書あり）を伝え、今に我家は冬至の日にこの神農像を床間に飾って御祭りを続けている。俳句をよくし、墓は筆子三十六名で建立してくれた。

二代養慶（天明二、一七八二年生、明治元一八六八年歿八七歳）は同じく江戸に学びその蔵書は本郷辺購入が多く、文化文政に江戸に学んだので写本も多く当時の書生としてはよく勉強をしており、独創で腸チフスの病型を富士山の山型で発病から終焉迄を正確に記している。漢詩をよくした。養慶は女の子ばかりだったので長女（かえ、俗におかよ婆さん）に金崎の二た山越しの西の寺尾村荒井家（後世、荒井恵侍医頭あり）から憲敝・称名為八を貰った。壬生藩から未端儒医帯刀御免となり、高田河内守の短刀が我が家に伝わっている。墓は筆子五十七名が建立してくれた。

三代為八（文化七、一八〇一年生、明治十九、一八八六年歿七七歳）は特別猛勉家で江戸にも水戸にも医を学び、「環海異聞」の精細写本なぞし早く海外に目を向け日本国北方・南方の地図の筆写が多く、洋学を幼稚なれど学んだ跡がある。本間玄調和郷輯なる「医方纂要」三巻の写本（天保十五年甲辰春三月、弘化元）を包む帖には大きく「活物」と記し、オランダＡＢＣＤの横文字筆写も落書きされている。

序に毛筆着色シーボルト肖像図（右向き）の壱幅があるが、水戸の玄調の処で写してきたらしい。水戸に学んだ時に、常陸太田の辺で往時産出の上質撤欖（かんらん）石を求めきて自分の墓石としたので今に共同墓地ピカ一の石材である。為八

の長子は大酒家であったので二番目分家杉村屋川島家の嫡男が絶えたので養子に出したので二男の精軒が跡継ぎとなった。

以下順次、四代精軒、五代慶治、六代精迄を述べる。

（眼科開業）

江戸時代の家庭看護

山根信子

我が国で看護という行為が職業化したのは明治時代になってからである。それ以前は仏教が隆盛であった時代には看病僧が、キリスト教が伝来してからは奉仕女、あるいはシスター達の手によって看護が行われていたが、それらは全地域、またすべての階層の人々にゆきわたる程、活潑ではなかったようである。一般の家庭では民間伝承による看護、または医師の手による看護、あるいは医師の指導、指示のもとに家人が行うというのが一般的であったろうと種々の文献から推察される。特に仏教が衰退して看病僧が激減し、キリスト教の弾圧によって奉仕女達の活動がかくれてしまった以後、江戸時代には看護の殆んどが、家庭で家族あるいは使用人の手にゆだねられたといってよいであろう。

しかし、その指導の実権は医師にあったと考えられる。